奥山ばなし（奥山譚）

おくやまばなし

作／多田徹
上演台本／大澗弘幸

プロローグ

不思議ですてきな、とある場所に風のように現れた三人は楽しい遊びを始めます。

イメージ遊び

からだ、顔、手、つながって、ふれあって、イメージして、そして生まれる遊びの数々。

とばして遊ぶ

紙や布や折ったヒコーキを風にのっけて、とばしてみると・・・。

■演出にあたって

子どもたちへの応援歌

中島　研

「子どもは風の子、天の子、地の子」作品づくりの過程の中で、この言葉に大きなエネルギーをもらった。ちょっと古めかしく、なつかしい言葉の響きの中に、明治、大正、昭和、平成の時代時代に生きる子どもたち、そして二十一世紀のアジア、アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ、この地球上で生きているたくさんの子どもたちの姿が目に浮かんだ。

時代や国家、民族を超えた、さまざまな状況下に生きる子どもたちに向かっての、大人からの応援歌になると思えた。

アフリカのマダガスカルでは「風は王様」であったり、中国の雲南省では「風は雨を運んでくる大切な宝物」でもあり、ヒマラヤを越えた風が熱風となって吹いてくるチベットの村では「風が、わざわいを払い、幸せを運んでくれる」と信じられていると聞いた。

「子どもは風の子、天の子、地の子」と口づさみながら風のようにやってきた三人が、不思議な空間で、遊びを通して向きあい、生きていくことのすばらしさ、悲しさを感じあいながら、舞台の上から子どもたちの心に響く風を吹かせていくことができるか、そして、それが子どもたちに向かっての応援歌になれば、と願っている。

あらすじ

山の奥の炭やき小屋で炭を焼いてくらしているおじいさんがいました。町に住む娘から一緒に暮らそうと言われても、この冬も山にこもっています。でも、孫からの手紙は首から下げた小さな袋に入れて、肌身離さず持っていました。

もう一人、猟師も山の獲物を捕えて暮らしを立てていました。

ある日、おじいさんのところに、豆太という子どもがやってきて、「とうちゃんとかくれんぼしていて、ここにきた」といいます。お腹のすいている豆太にごちそうをしてやると、すやすや寝てしまい、よく見ると豆太の尻には尻尾が・・・。思わず鉄砲をかまえるおじいさん。しかし、あまりにかわいい豆太の寝顔に、気付かぬ振りをして豆太をとなり山に帰しました。豆太はときどき遊びにくるようになりました。

ある日、「かくれんぼをしていたら鉄砲の音がして、どうしてもとうちゃんがみつからない」と豆太がやってきました。その少し前に猟師から、やっととなり山の大だぬきをしとめたと聞いていたおじいさんは、豆太を小屋の囲炉裏の前にすわらせました。

とうちゃんから「しばらく遠くへ旅に出るので豆太をたのむ」と言われたと、おじいさんは豆太に話してきかせました。そして、首から下げていた袋から孫の手紙を取り出し、「豆太へ、とうちゃんより・・・」と豆太にとうちゃんの手紙を読んで聞かせると、豆太の首にその小さな袋をかけました。

プログラム

◎あそび
- プロローグ
- イメージ遊び
- とばして遊ぶ

◎お芝居
- 「奥山ばなし」
- 「おばけたんぽぽ」

（お芝居はどちらかを選んでいただけます）

おばけたんぽぽ

作／岡本颯子

あらすじ

世界でいちばんちいさな国の、世界でいちばんちいさな野原に、世界中からたんぽぽのわた毛がとんできました。たんぽぽのわた毛が集まると、雨がふり、おひさまが照り、いままでみたこともない大きな大きなたんぽぽが咲きました。

国中からいろんなひとが、このたんぽぽのまわりに集まると、とてもふしぎなことが起こりました。

＊

生きていることの喜びや、生きていくことへの希望が、ほのぼのと湧きあがります。